

韓雪野「過渡期」(一名、夜明け)の日本語訳

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会 公開日: 2024-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮, 大木, 喜義, 中村, 玲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000533

韓雪野「過渡期」(一名、夜明け)の日本語訳

南 富鎮、大木 喜義、中村 玲共訳¹

1

昌善は四年ぶりに故郷に帰って来た。帰って来たというより追われて来たかたちであった。チャンコロ²たちの嫌がらせで、間島³でも暮らすことが出来なくなっていた頃に、藁にも縋る思いで、ふと気づけば、おのずと足が向かったのは、昔暮らしていたこの地であった。

しかし、凍てついた冬の豆満江を渡り、いざこの地に足を踏み入れてみると、思い描いたものとは全く様子が違っていた。——一日で耕せる一反ほどの畑と二反ほどの田圃を買える金さえ稼げたら、鼻歌を歌いながら故郷に戻れたのに——そればかり考えながら、いざ帰って来てみると歓迎してくれる場所など、どこにもなかった。「生まれ故郷恋しきぞ。死してなお帰りたいかな」といった思いは徐々に薄れていった。

ようやく故郷の裏山の峠に辿りついてみると、改めて心配が胸をよぎった。——どんな面下げて家族や村の人に会えようか！ちっぼけな田畑一枚さえ買う金もなしに——

「はあ」と昌善は深く溜め息をついた。しかし気は重いままである。彼はぼんやりと立ち尽くし、雑に丸めておいた荷物を地面に下ろした。一息ついて、幾分か軽やかな気持ちで恋しい故郷に戻るつもりであった。

¹ 底本は『カップ代表小説選1』（四季節、1988、ソウル）。本文には咸鏡道方言と今日では使われない言葉が多くあり、そうした箇所は一部前後関係で補った。また本文には検閲によって多様な形（×形態、…形態）の伏字があり、それに作者による省略記号（…、……形態）が混在して判別が難しいところがあった。不要な文章記号を整理し、伏字の箇所はできるかぎり残すことにした。なお、共訳者の大木喜義は静岡大学人文社会科学部研究科比較地域文化専攻修士2年、中村玲は静岡大学人文社会科学部言語文化学科4年である。

² 中国人の差別語。本文でのニュアンスを生かすためにあえて差別語を使用した。

³ 豆満江以北の満洲にある朝鮮民族居住地を指す。現在の中華人民共和国吉林省東部の延辺朝鮮族自治州一帯で、中心都市は延吉である。

「おい、その子を降ろして一息ついたらどうだい？」

「ようやく眠ったのに……、この子ったら、またおもらしたんだね。冷たいったらありゃしない」

妻は「だるま」のように布にくるまった子供を背中から降ろした。おしっこで濡れた彼女の背中からは蒸気ももんと上がっていた。

「おい、これって様子が全く違うぞ！」

彼は目を丸くして妻を見た。故郷とは思えないほど一変していた。一変したというより跡形もなくなっている様だった。そこには、色あせたレンガ造りの家やタン屋根の煙突が所せましと並んでいた。

「まるで工業地帯じゃないか！」

「まあ、なんと、あの黒いのはなに。……あ、あっちが以前に住んでた倉里じゃないの？」

妻は、まさか故郷が丸ごと移ったり、消えたりするとは思ってなかった。どこかその辺にあるような、なんとなく面影が感じられるような気がした。

「あそこの……、海辺の向こうまで工業地帯になって、どこにあるっていうんだ……、待てよ、あれが兄弟岩で、あそこがクンクン（波の強い瀬）だよな……」

「さあ、いったいどうなってるの？」

妻も仔細に見渡してみたが、かつての村の姿は見えなかった。

「崔村長や朴巡査の家までもなくなっているよ！」

「やつらは国に養ってもらってるから、どこへ行ったって暮らしていけるよ」

「だけど、うちみたいにふらふらはしないでしょう。三〇〇年だか五〇〇年だか……、いつの王の時代なのかよく分からないほど前からここで暮らして来たんだから……」

冬の太陽が早くも沈まんとしている。北の海からは肌を刺すような冷たい雪交じりの風が、びゅうびゅうと吹きつける。二人は歩く気力すら失ってしまった。間島にいた時には、あたかも泰山⁴のように信じ込んでいた故郷であり、救いの神のように頼りにしていた兄の家であったが、すべてが跡形もなく消えてしまい、途方に暮れた。

「とにかく行ってみましょう。あそこに行ったら聞いたらわかるでしょう」

⁴ 中国山東省にある山。儒教の聖地である。本文では信頼できる安心感を示す隠喩として使われている。

妻はいまだに望みを失っていないようだった。行ってみればなんとかなると思っ
ているようであった。

「いったい誰に聞いてみればいいんだ……」

そうつぶやいて、昌善はふたたび荷物を背負った。

「昼飯はいくらか残っていたか？」

「残ってるはずないでしょう……、どうせ雀の涙ほどの飯なんだし、いくら食
べたってお腹いっぱいにならないよ」

二人は行く当てもなく歩き続けた。山の斜面には細長いレンガ造りの官舎が
日本兵のように規則正しく並んでいた。平地には鯨のように巨大な工場が立っ
ており、高い煙突が周りを睥睨するかのようには聳え立っていた。

こちら側にはアシハラガニのように小さな石造りの家が、レンガ造りの建物
に気圧されるかのようには縮こまっている。小さなホットク⁵屋の煙突からは細
い煙が上がっていた。

青黒い制服に身を包み、土色のゲートルを巻き、中国人なのか朝鮮人なのか
日本人なのかよく分からない見慣れない人たちが忙しく駆け回っている。腰
ひもをぎゅっと引き締めた長袖の中国人たちが騒々しく通り過ぎる。朝鮮人と
思わしき人たちは、不格好にゲートルを巻き、にわかちょんまげを切り、南
道方言を使う輩ばかりだ。昔のようにちょんまげを結ってキセルを手を持った
人たちはどこにも見えなかった。

昌善はそうした連中とすれ違うたびに、なにかを聞こうとしては躊躇うこと
を繰り返していた。なぜか言葉が出てこなかった。そうして何度も見過ごして
いた。いざ話しかけようとしたとき、もしかしたらどこかに知り合いがいるの
ではないかと人ごみの中を見回した。

しばらく歩いていると、向こうから白い服を着た男が一人歩いて来た。遠く
から見ても、土臭く、魚臭い、馴染みのある昔の人間ではなかったが、その男
が独りで歩いてきたので少しは懐かしく感じられた。

「皆なんて険しい顔なんだろう……、人間までも変わってしまったのね……。
わざわざ戻って来るんじゃないよ。こんなところで暮らせやしないよ」

妻は不安そうに愚痴をこぼした。戻ってみればなんとかなる、という思いも
だいたい消えかかっていた。

「あの人に聞いてみたらなにか分かるさ。まさか飢え死にすることはないだろ

⁵ 朝鮮の食べ物。薄い小麦生地の中に黒蜜を入れて油で焼いたもの。

う……、労働者でもなんでもなるさ」

昌善はいよいよ袋小路に追い詰められた感じがした。

「あの——」

目の前に迫って来た白い服の男は訝し気な表情で足を止めた。

「あの……、えっと……、海辺の倉里はいったいどこに行ったのでしょうか」

「倉里ですか？」

彼は昌善夫婦の様子をなめまわすように見たあと、さりげなく答えた。

「峠の向こうの九龍里に移りましたよ。だいぶ前ですよー」

「九龍里ですって？」

昌善はため息をついた。九龍里ならよく知っている場所である。故郷ではないが、それに近い場所だった。家の戸数や道の細部までよく覚えている。

「あそこの九龍里ですよ。それじゃ、倉里の人たちは皆あちらに移ったんですか。もしかして昌龍（昌善の兄）って人は知りませんか」

「知っているわけないでしょう」

白い服の労働者はそう答えると無然として歩き去った。昌善はその人の行先を一瞥したあと、妻に向かって困ったような笑顔を見せた。

「九龍里に移ったみたいだ。なんと、まあ、こんなことになっているとは」

「あいつら、よりによってなんで倉里なのよ」

「ここがうってつけの場所なんだよ、土地も広くて……」

夫婦はすぐに九龍里の裏山に向かって歩いて行った。少しは元気が出た。荷物を背負った夫の背中もいくぶん軽やかになり、妻の風呂敷もいささか軽くなった気がした。

2

九龍里の裏山の峠道は途断えていた。鉄道の線路が矢のように一直線に海辺まで続いている。「フミキリ」(原文日本語)に立ってみると「レール」が南北に果てしなく伸びている。どこから始まり、どこへ向かうのか、終着点はぼんやりとしてよく見えない。騒がしい光景に驚くばかりである。見慣れない光景で温もりなど感じられなかった。昔の牛車や木船がどれほど懐かしいことか。「プーワーン」という汽笛の音で耳が痛くなる。

昔のことが夢のように思い出された。日当たりのよい峠の松の木陰で昼寝していた昔日が懐かしい。ツバメが電線に止まって羽を休める春先に、田畑を耕していた記憶が懐かしく思えた。焼いた川魚に粟飯をたっぷり食べ、「のそのそ」

草取りをしていた畑が懐かしく思い出された。

村の子供たち、若い青年男女らが早朝からそれぞれの家を出て、牡牛や牝牛に跨り、「アリラン」を口ずさみながらこぞって放牧へ出向いたのもこの近くである。

「ケトン⁶、牛飼いに行こうや」と呼びかけると、

「ジョンヤンかい、分かった。よし行こう。サンドルとホッカンまだ来てないんか？」⁷と答えながら牛を連れ出して来る。

「おい、お前の牛は胸骨が見えないな（肉が付いたら胸周辺が盛り上がってくる）」

「うちのはさ、牡牛だからやろ」

「いや、牡牛は発情して、春になったらやせ細るらしいで」

そうこう話を交わしているうちに、牛飼いの子供たちが四人、五人、やがて十数人ほど集まる。そうなればおのずとアリラン節が始まる。

蜜より甘いは 峠の恋

遊ぶによいのほ 二巻きのまげ（未婚男性が地毛で結った髻）

アリラン アリラン アラリヨ

アリラン峠を 越えさせて

小川の岸には 小石も多く

私の嫁ぎ先は 小言も多い

唄と踊りで日が暮れることも忘れる。しばしば杭に牛を繋いで留め置いたまま、なぞなぞや石遊び、王様ゲーム、目隠し鬼ごっこ、花嫁ごっこ、長馬などで遊んだりもした。冬になると海辺に行き、網に凍って氷柱のように連なっている魚をむしり取る。村人のおおよそ半分が農業で、残りの半分は漁で生計を立てている。おのずと子供たちにも二つの仕事がある。魚がよく獲れる年は、一日で三十銭ほどの稼ぎがある。そのため、若い男女が出会う機会も多く、当たり前のようにお互いに会話を交わす。

そうしたなかで昌善も今の妻に出会った。わかりやすく言えば、恋愛をした

⁶ ケトンとは人名の蔑称。意味は犬の糞である。

⁷ ジョンヤン、サンドル、ホッカンとは人名の蔑称。ジョンヤンは便所、ホッカンは物置、サンドルは下衆男の意味か。

のである。

「これ、食べない？」

牛飼いの時、昌善はわざと順男（今の妻）のそばに近づき、買ってきた大きな飴玉を高く持ち上げながら「欲しい人！」と大声で言った。

「わたし」

「いや、おれ、おれ！」

子供たちは自分も自分もと声を上げた。

「はい、順男が一番だ」

昌善には誰が先に声を上げたかなんてどうでもよかった。最初から決めていた順男に飴を二つほど手渡し、残りはすべて自分の口に放り込んだ。

「順男や、噛まずになめるんだぞ。どっちがもっと長くなめていられるか勝負だ」

その様子に、周りの子供たちは羨ましくなって唾をぐくりと飲み込む。

「あの野郎、ズルしてるな。おれが先だったのに」

「そうだよ、あの子が先だよ。その次がぼくなのに……、なんだよ、順男があんたの嫁さんかい？」

「順男の母ちゃんにチクってやるからな」

こんな根も葉もない不満が沸き起こる。すると、事情のわからない順男はまんざらでもない様子で強く言い返す。

「おいこの野郎、嫁ってなんや。あんた、うちの母さんに何をチクるって？　なんでそんなにへそ曲がりなの？」

「バカヤロー、私のどこがへそ曲がりなの」

こうして喧嘩が起きる。このような出来事がすべて素朴な彼らの胸に忘れられない懐かしい思い出になっていた。

年を取るにつれて、昌善と順男は互いに以前より距離を置くようになった。時には他人行儀なこともあった。しかしそうすればするほど、心に秘めた気持ちは大きくなるばかりであった。

昌善は田圃の草取りをしているときなど、順男がヒルガオの根っこやナズナやヒメニラなどの山菜を取りに出てくるのを見るや否や、人目を盗んで近寄って行く。

「なに採ってるんだ？　ヒルガオか？」

「掘る道具がないのよ……。深く掘らなきゃダメみたい」

順男は昌善をちらっと見てはそっぽを向く。言葉遣いも以前より穏やかになり、

身の振る舞いも娘らしくなっていた。

「俺が掘ってやるよ……、今夜飯食いに行くよ、いい？」

「勝手に来ればいいじゃない。今夜はヒルガオの餅を作るかも」

「お、ほんと、絶対に行くよ。でも、お前の家族に怒られたらどうしよう」

「怒られたことなんてないでしょ。来てみたら分かるんじゃない」

こうして純朴な二人の心は固く結ばれた。

冬になると漁の報せが広まる。鱈と明太の船が港に戻ると、豊漁だ、豊漁だと、老若男女の歓声で賑わう。女たちは頭に木の器を乗せ、男たちは手押し車を引いて魚を買いに海辺に集まる。順男も毎年それに出向いた。いつも昌善の持ち船から魚を買い取っていた。昌善は持ち船が漁から戻ると、大急ぎで港に出て魚を売りさばく。嬉しいことに順男がいつも買いに来るからである。この仕事が彼にはなによりも楽しい仕事であった。ひとしれずの想いを抱いていたからである。彼は早朝からウキウキして魚をさばき始める。

「一束でいくらかね」

魚の行商人がそう尋ねると、

「六十銭も買えば首の骨が折れるくらいですよ」

「卵はしっかり詰まっているかい？」

「卵が詰まってるかだなんて……、腹の中身だけ売っても儲かるくらいですよ」

「三束だけもらおうかな」

「うちも頼むよ」

こうして女も男も我先にと競いながら買っていく。

「ひとつ、ふたつ……、とお……、これで一束。はい、三匹おまけしときますよ」

昌善は年が若く、魚の扱いにも慣れていないので女にばかり魚を売っていた。ひとしきり数えると額に汗がにじみ、重い腰を伸ばしながら顔をあげると、日焼けした女たちの間に順男が見える。人が込み合っているのだから、順男は昌善のすぐ前に器を置くことができず、斜め前に置いておく。そしてじっと自分の足元を見つめたり、ふと広い海に黙って視線を送ったりする。顔が赤くなっているようだった。昌善はニヤッと笑いながら、卵がぎっしり詰まっている鱈を選んでは、手鉤で突いて順男の器に数え入れる。無雑作に、一束に六、七匹ほど多く入れてやる。

これほど思い入れのある故郷であり、こんなにも慣れ親しんだこの海である。しかし今では全てが変わってしまった。山も川もなにもかもである。鉄道が

峠を分かち、倉里の港には船影も無くなった。土香りのする村はなくなり、その代わりに、鼻をつく鉄臭い工場やレンガ造りの家が我が物顔で連なっていた。牛車の代わりに汽笛の音がうるさく鳴り響く。農家の人たちは山陰の斜面に追いやられ、労働者の群れが闊歩する。地面は石炭の埃で黒く変色し、ペタラギ（船頭）の音頭で賑わっていた港は波の音でうら寂しい。昌善の目には陸も海も死んでしまったかのようにみえた。工場やレンガの家、鉄鎖や煙突がいくら仰々しくても、所詮は無意味で、わけの分からないものに思えた。

二人は線路の土手を越えて峠に登った。遠く of 海辺に移転した故郷の村が見えてくる。しかし昔の九龍里にあった故郷とは似ても似つかないものだった。線路のせいで村の真ん中がすっぱり途切れている。村の入口を見守っていた松林は老人の前歯のように丸ごと抜かれている。汽車の煙突から出る火の粉で焼け焦げた家が二、三戸横たわっている。背の低い石積みの家が小さく縮こまっている。いまにも潰れてしまいそうである。潰れると一家がまるごと下敷きになるだろう。昌善の頭の中に白昼夢のように不気味な光景が浮かび上がった。——潰れた屋根から屈強な若者だけが頭を半分ほど突き出し、年寄りや女子供たちは下敷きになって喘いでいる光景である。

倉里から移転した人たちの家は、慣れない土地に溶け込めないまま、遠く of 海辺に集まっている。今にも波に飲み込まれそうである。それでも海辺に住み慣れた人たちには、見慣れない汽車よりは海の方が落ち着くようであった。

「あんな所に住んで大潮が怖くないのかな」

「海が近いから魚の仕入れには最適でしょう」

妻の頭は魚の仕入れのことでいっぱいだった。

「満州では魚が食えなくて胃がおかしくなったけども……」

「お金さえあれば満州どころか西洋に行ったって太平だろうにね」

二人はこんな話をしながら、兄の移転先を尋ねるために人を探したが、なかなか人影が見えなかった。船が出ない冬であれば人の行き来が多いはずだが、意外だった。魚がよく取れるのであれば行商の魚売りにずいぶんとすれ違っただけである。しかしだれ一人見当たらなかった。

3

昌善が道端の子供に聞いて兄の家にたどり着いた頃には、あたりはすでに薄暗くなっていた。母は古びた毛布にくるまって囲炉裏のそばに横たわっており、甥と姪は暗い燭台の下でイモ餅を焼いていた。

「お母さん、昌善です」

「お義母さん……」

二人は玄関のドアを開けて入るや否や、大股で台所に上がり、母親の前で古式⁸の挨拶をした。

「なに、昌善だって？」

母は驚きながらとても喜んだ。

「お母さん、その間、病気はしませんでしたか。みなお変わりありませんか？」

「まあ、それにしてもこんなに寒い中でよくも帰ってきたね」

母は目ヤニで濁った目をしばたかさせながら昌善を子細に見つめる。目には母ならではの複雑な感情が入り混じった涙がたまる。

「生きてればまた会えるもんだね。息子が生まれたんだってね。どれどれ、名前はなんていうの？」

「間島で生まれたのでカンナムと名付けました。寒さで風邪をひいて、すっかり弱りきってますよ」

妻は乳を飲んでいて息子を引き離し、母に抱かせた。

「なんとまあ、大きくなったね。こんなに重いなんて、去年の九月に生まれたんだってね。わたしみたいな老いぼれはさっさと逝って、お前たちが良い暮らしをしてほしいのに」

母の目からは大粒の涙が零れ落ちた。

「そういえば、そっちでの生活はどうだったの。ここよりはましだと聞いたけど」

「とんでもないです。死ななかつただけで幸いでした。満州のやつらの迫害に追われて仕事どころじゃありませんでしたよ。私たちが暮らしていた地域でも五十いくつの家がありましたが、すでに十軒もどこかへ追われていきましたよ。有無を言わず土地を奪って追い立てるからどうすることもできないのです。うちの隣村の嶺南から来た一家は全滅しましたよ」

「なんと、皆殺しだなんて、おぞましい」

「老いた母親と妻、子供たちを置いて亭主が出稼ぎに行ったみたいです。しかし思うようにいかず二十日ほどで戻って見たら、母親は部屋で凍死していて、妻はどこかへ行ったのか姿が見えなかったそうです」

「あらまあ、満州のやつらにさらわれたのかね。まったく、人が住むところじゃ

⁸ 両ひざと両手を地面につける朝鮮伝統の挨拶。

ないね」

「そうじゃなかったですが、亭主もはじめはさらわれたと思ったみたいです。だから包丁を持って探し回ったそうです」

「殺そうとしたのかね。まあなんと、むごいことだね」

「旦那が狂ったようにあちこち探し回ったら、凍った雪の中に人のようなものが見えたそうで、いざ行ってみるとそれが妻だったそうです」

「あら、それで生きてたのかい？」

「いや、雪の中で凍死したんですが、頭にはトウモロコシを一升載せて、一人の子供は後ろに背負って、もう一人は前に抱きかかえたまま凍り付いていたみたいですよ」

「ああ、お天道様も無情だね、彼らになんの罪があるというのかね」

「それだけじゃないですよ、旦那も亡くなったみたいです。発狂して……」

「人が暮らすところじゃないよ。もう勘弁して。そんな恐ろしい話を誰が信じるんだい……、それでもお前の兄さんはいざとなったらそっちに行くんだって……、ああ、無情な神様」

「噂だけを信じて行ったらえらいことになります。そうやって死んだり、追いやられたりする人が数えきれないみたいですから。そうでなければ、こんな寒いときに帰って来たりしませんよ」

「みんな大変だね、死んだ方がましだよ……、いまま大勢の人が生きようと向こうへ行っているけど」

「そうだ、兄さんは町へ行っただけですね。おばさんと一緒に……」

「泣き面に蜂さ。生活が苦しくなって、今日蹴起があるとかないとか、村中がみんなそっちへ押し掛けていますみたいだよ」

「蹴起って？ 何のためにですか？」

「知らぬが仏だよ。まったく、生きた心地がしないね。みんな飢え死にするって騒いでるよ」

「だからと言って郡守が何かしてくれるわけでもないでしょう」

「藁にも縋る思いだろうね。怖いものなんかないよ、魚が獲れなきゃ食べるものがないからね」

「魚が獲れないことを誰かのせいにできますかね。時代のせいですよ」

「時代のせいじゃないのよ。入り江が悪いからなんだよ。船も止められないし、停めたと思ったらすぐ壊れちゃうみたいだし……、十月には砂丘にあるお家の鱈船が潰されたのよ。三人が魚の餌食になったそうだ。そのお家の主人が怒り

狂って会社へ抗議に行ったけどやつらに追い返されちゃったよ。それで酒に酔っぱらって、船の破片を叩いて慟哭しながら凍死したのよ、まったく」

「それは一体なんの会社ですか？」

「まだ倉里の様子を見てないの？ ……あの×××だよ。ふざけてるよ、ほんとに」

「どうしてですか？」

「ここに移って来たのは誰のせいだと思うの？ 倉里は本当に良かったからね。運が悪けりゃ後ろに転んでも鼻が折れるというけど、あの場所を諦めたのが運の尽きだったよ」

母の話聞くだけでは事の詳細が分からなかった。しかしただ事ではないことが起きたことくらいは想像がついた。それでも村全体が潰れていくのはわかかに信じがたかった。

疑惑もさることながら酷く腹がすいていた。そのため、母が勧めるままに、兄夫婦のために用意してあったジャガイモでひとまず腹を満たした。

「何かあったかもしれないね。行く時もぐずぐずしていたが、なんでまだ帰って来ないんだろう」

久々に息子に会った母の喜びも次第に薄れ、しばらく忘れていた不安がまた胸をよぎったようだった。

「そうですね、空も急に悪くなってるし……」

昌善夫婦も兄夫婦のことがひどく心配になりはじめた。

「天気も天気だけど、何かおかしいよ。村の皆が会社へ押し掛けるたびに、××が妨害してたのよ。それで今朝は市日いちひを口実に早朝から皆がバラバラに出ていったけど……。きっと何かたいへんなことが起きてるよ、まったく」

「きっと帰ってきますよ。横になって休んでください」

母を安心させようと思ったが、事情がよく分からず、かける言葉が思い浮かばなかった。母は寝返りを打ちながら、終始心が落ち着かない様子であった。甥と姪は昌善の子供を取り囲み、割りばしに火をつけてぐるぐる回して遊んだり、イモ餅を取ってあげたり、手拍子をしたりしていたが、しまいには倒れるように眠ってしまった。いつのまにか妻も幼な子を抱いて寝込んでしまった。

4

兄の昌龍夫妻が家に戻って来たのはだいぶ夜が更けた頃であった。

「どうしたらこんなにも変わるんですか。まるで違う土地に来たみたいですよ」

久しぶりに再会した懐旧の挨拶を済ますやいなや、昌善は間島の事情を大まかに伝えてそう言いました。

「全くその通りだよ。まさに青天の霹靂だよ……、一人二人じゃなく村全体がもうすでに死にかけてる……、そうだ、この噂は聞いてないか？ 新聞社という新聞社はみんな押し掛けて来たよ」

「そうですね、大まかなことは母さんから聞きましたが……、まったく初めて聞いた話ばかりです」

昌龍はまず××××××××××が出来上がる時の様子を話した。この近辺の土地を買収して………という噂や、その間、いわゆる××の有力者たちがおだてあげた詐欺まがいの話をした。

「こっちに移りさえすれば、ここに仁川ほどの港を作ってあげるとか。市場、学校、郵便局、大きな道まで全部作ってあげるとか……ごちゃごちゃした地図を持ってきて九龍里を指しながら第二の仁川計画を見てください……、生き馬の目を抜くような世の中でさ……」

「それで、どうなったんですか？」

「住民が二千人もいるからそんなに早くはどうせ作れまいと思って、九龍里に倉庫くらいの設備を整えてくれるなら移っていいと言ったのさ……、それで俺たちの間では誰一人も先に移らない……だと村中で約束したので………と思っただら……やつらはいかにも図々しくそれで良いと自信満々に約束したのでさ……まったく、ここまで詐欺師だとはなあ。そう約束しておきながら裏では一人ずつ潰したみたいだな」

「潰すというと？」

「口車に乗った奴がバカだよ。あそこの井戸端の家にスギョン（守敬）がいるだろ。もの腰の柔らかかそうな。××は口の達者な者をそこに送り込んだよ。大きい封筒に何かをぎっしり詰め込んで、金持ちになれる封筒だと言ってさ……ひとまず九龍里に移りさえすればこの封筒をあげるからよく保管しておいて、開けてみたらすごく儲かるよと」

「なんの封筒ですか、それで本当だったんですか？」

「本当なわけないだろ。先だって開けてみたら十円札が一枚だけ入ってたみたいだよ……、それですっかり舞い上がって、村の約束事を破って先に移って行っちゃった。殺される覚悟だったんだろう。とはいえ、同じ村の人間を殺すわけにもいかないし……、どうしていいのかわからない、いろいろ騒いでいるうちに、お金の噂話に釣られて一人また一人と、港の整備も整わぬうちにみんな移ってしまっ

たよ」

「家の代金はもらったんでしょうね？」

「それはもらったけど、それではどうにもならないよ。魚が全く獲れないんだから……、今年の漁はからっきしだめだったよ」

「そんなに獲れないんですか？」

「まったく、この入り江を見てなかったのか……、港を建ててくれるとかなんとか言っていたのに、あの出来上がった様を見てみる。屋敷の庭くらい残して、左右に五十数歩ほどの石垣の土手を作りやがって。そんなところに船なんか停められるかよ……、一年も経たない内に四十五隻あった船のうち九隻が壊れたよ。あそこのユ官庁⁹のお宅と砂浜のところの家と……」

「その話は聞きましたが、死人まででるとは……」

「まあ、聞いてくれ。西湖に行って仕入れてきたら少なくとも二十両（四円）は余計にかかるんだよ。西湖までの道のりは石ころだらけで担いでは大量に運べないし、荷車が通れるような道でもないし……、ましてや海風が強くて行商人がどれほど凍え死ぬかわからない。だからさんざん会社に訴えたけど、まったく聞き入れてくれないよ」

「あんな……は……それを……しておきますか？」

「道庁が設計をしたので、自分たちはその通りに工事をしただけだから知らないというし……それで今日は×××のいるところに行ってみたよ……代わりに×××が出てきて帰れとしか言わないし、当人は姿も現わさなかったよ」

「それで、会えなかったんですか？」

「夕方によく会えたよ。良きに計らうというから、仕方なく釘を刺して帰って来たところだよ」

「それにしても女たちまで……、おおごとですね、ほんとうに」

「足に火がつくから行くなと言っても行くんだよ。そうでもしなきゃ官庁も聞いてくれない。ここには繁栄会という組織があって、代表が何回も訴えに行っていたが、帰って待つようにと繰り返すだけで、まったく聞いてくれない。それで今後は代表だけでは無理だと思ってみなで押し入ったのよ」

「じゃあこれからはうまくいきそうですか？」

「うまくいったらいいが……、入り江があまりにも深くなっているから一間あたりで数万円の金がかかるみたいだよ」

⁹ 以前に役所（官庁）の雑役婦だったのでそれをあだ名にしているのか、不明。ユは姓のことか。

「それでも当然会社がやってくれないと困るじゃないですか。やってくれないのなら村を元通りにして返してもらえないでしょう」

「とんでもない……………は俺たちの訴えどころか、××さえないがしろにしているよ。どんな領議政¹⁰の権勢を背負ってるのか、××のやかましさに勝てる將軍などいないよ。金がすべてだよ。大臣だろうが、×××だろうが、なにも怖いものなんかないのさ……………あの判事¹¹を見ろよ……………名刺の一つも渡せないよ、警笛を鳴らして車ですぐ消えちまうから」

寝転んであんな話やこんな話をしているうちに昌善は疲れが出ていつの間にかいびきをかいていた。しかし、兄の昌龍はあれこれ考えているうちに、ついに明け方まで眠れなかった。新たにもう一つ重荷がのしかかった。

5

昌善は急にやるせない気持ちに捉われた。故郷だからと恋しがり、親族だからと会いにも来たが、想像していたものとは天と地の差があった。朝鮮に戻ればどんな仕事でもやる覚悟だったが、いざ来てみるとその「どんな仕事」がどこにもなかった。仕事をしようにもする仕事がなく、体力を使おうにも使う場所もなく、魚も獲れず、農事をすることもできない。代々受け継いだ慣れた仕事や楽しい仕事はどこにもなく、目はうつろになり、生きた屍のようであった。

しかし、懐かしい思い出や故郷は消え、なじめない新しい機械仕掛けが主人のように占めていた。黒い煙突が聞き慣れない騒音を掻き立て、目に慣れないおぞましい工場が新しい働き手を探してはいるが、それらは自分の身体とはあまりにも距離が遠いようだった。それだけ、やりがいがあって、やりたいと思っていた以前の仕事に対する愛着がまだ胸の奥に深く根を下ろしていた。なのにそんな仕事はどこへやら消え、夢にも思わなかったとんだ仕事ばかりが蔓延っていた。げっぶをしながらかつて貧しい人たちを差別する。このような新しい世界にはとても足が向かない。しかし、それは拒否の出来ない絶対命令で、泣き叫ぼうとも行かざるを得ない場所である。こうした過渡期の恐怖と悲しみが昌善の戸惑う胸に突き刺さってくる。

九龍里の村人の暮らしはさらにひどいものだった。冬を越し、春を待つ間に、米櫃には一粒の米もなくなってしまった。

¹⁰ 領議政：朝鮮王朝の最高の官位で、現在の国務総理に当たる。

¹¹ 朝鮮王朝の最上級官吏、判書のことか。日本の大臣に当たる。ここでは以前の朝鮮王朝時代に大臣を務めた朝鮮人を指すか。

ケドク（魚を乾かすための杭）はかまどの火をくべるのに使い果たした。それでも善処するという当局からの良い知らせは届かぬままである。入り江からはペタラギ（船頭）の歌声が絶え、山野からは撃壤の楽しい唄が消えた。ただ聞こえるのは、黄昏時の労働者の悲しい歌ばかりである。

長津江の水は山を越え
水力電気に成り
内湖の底は機械に食われ
窒素肥料と成った
アーリオンアーリオン
アラリになったよ
アリラン峠を
越えさせたまえ

畑の良いものは
機械の置場となり
娘のこぎれいな者は
料理屋の館に行く

恨みがましく、沈み切ったアリランである。黄泉の使者の飯を首にぶら下げたペタラギの歌声よりも元気の出る新しい歌である。昔の暮らしを皮肉り、新しい生活を自慢する新曲である。

その後まもなく、村人たちはちょんまげを切って工場へ殺到した。だからといって簡単に雇ってくれるわけではない。力持ちで骨太く、肌色が黒く、若くて図体の大きい、強面の人間だけが選ばれた。それにはじかれた年老いてひ弱な人間たちは、ほんの小さい畑にしがみつき、めっきり獲れなくなった鮎などで生計を立てるほかはなかった。或る人たちはありったけの財産を風呂敷に詰め込み、寧遠や長津へと追いやられていった。

焼き畑でもやろうとしているのである。

昌善は運よく工場の労働者に選ばれた。まげを切り、ゲートルを巻き、シャベルを担ぎ、コンクリートをこねるまったくの別人になった。